

谢谢大家给了我这么宝贵的一次经历！

8

南京で感じたもの

翁曉丹（立命館大学文学研究科研修生）

今回は通訳の仕事もしながらセミナーに参加させていただきました。去年7月に立命館で行われたワークショップに参加しましたが、今回南京で行うことに対して、期待しながらも心配していました。なぜなら、私は南京の大学で4年間を過ごし、日本語もそこで勉強し、いろいろ思い出がある場所だからです。歴史事実の発生地で、中国人が慣れていないドラマセラピーでワークショップを行うとどうなるかという心配もあったし、私が参加するなら、どんな感情が湧いてきて、そして自分がうまく処理できるかどうか、まったく把握できないという怖さもありました。

セミナーの1週間前、実家の祖父が他界し、死について考えながらセミナーに身を投じました。空港に日本人の先生とメンバーを迎えに行くときから、セミナーがすでに始まっているような気がしました。今回のセミナーでは、日本人の参加者も主役ですし、みんなほぼ初めての中国で、中国に着いた瞬間から感じたことは、そのあとのワークショップに何らかの作用があるかもしれないと考えていました。

ワークショップの初日から、悲しみ、痛みなどいろいろな感情が胸に湧き、昔から持っていた葛藤も混じっていて、最初は整理できない状態のままでワークショップにいました。

最初は、自分の葛藤ですごく辛かったのです。政治や軍事の目的で歴史を解釈して、その歴史観をそのまま教育やマスメディアを通して与えることで、国民の思想がコントロールされるのがいやだったので、日中の歴史を考えると、中立の立場に立とうと昔から思いましたが、いろいろ挫折して、辛かった経験もありました。したがって、セミナーの最初のころから、自分は日本側か、中

国側か、それとも中立か、頭の中ですごく混乱していました。日本人メンバーが感じとった痛みや悲しみ、罪悪感が、私の心にも染み込んできました。その感情が重く、また中国人として感じられた痛み、悲しみや怒り、そして中立の立場に立ちたいと思うけれど、中立でいられない孤独感や絶望、三重の感情が重なってきて、呼吸が止まりそうぐらい辛かったです。

さいわい、セミナーが安心できる場所を提供しました。日本人メンバーが私のことを見守ってくれたし、中国側の学生も暖かく私を受け入れようとしていました。二日目からどんどん心と体が開放できるようになりました。

そして、自分の身体の反応にびっくりしたこともありました。二日目のワークショップで、中国語で「中国人です」と言うとき、胸に湧いてきた何か熱いものを感じました。今まで感じたことない経験でした。「なんで泣いてしまったの？」って頭で理解できる前に、涙がすでにぼろぼろと流れてきました。意識と感情より、体のほうが先に反応することは、翌日午前中に行った生存者の証言のセッションにもありました。生存者の常さんが微笑みながら会場に入ってきたとたん、私は涙がぼろぼろ流れてきて、証言の最初から最後まで止まりませんでした。とても不思議な体験でした。でも、そのあとは不思議なことで、胸にずっと押え込まれたものが少し解放されたような感じがしました。

自分の体と心の変化を敏感に感じとれると同時に、他のメンバーの気持ちも敏感に察して、共感する力が4日間の中でどんどん伸びてきている感じもしました。

また、今回南京に行ってきて、使命感のようなものも感じました。中国でドラマセラピーをもっと多くの人を知ってほしいだけでなく、平和教育を新しい形で展開していけるように、私たちやるべきことがいっぱいあると思うようになりました。

また南京でみんなとの再会を楽しんでいます。